

《第7号》 ***インパクトファクターの誤用***

雑誌評価の指標として普及したインパクトファクター(=IF)、今号では、その性質の理解不足がもたらしめている誤用について、事例を挙げてご説明します。

1. 個人の研究評価への誤用。

(例)個人の年間研究業績として、その年投稿した論文の掲載誌のIF値を評価の対象とする前号でご紹介したとおり、IFはあくまでその雑誌の直前2年間の引用率であり、研究テーマの流行度や同じ号にスター論文が掲載されたなどの偶然性によっても変わるもので、その研究者の投稿した論文1篇の影響力を量ることはできません。まして投稿した様々な雑誌のIFの合計値を算出したところで、その研究の評価に繋がることはありません。主要論文が唯一定量化できるデータであるため、そのIFが偏重され、研究者採用の選考指標として用いられることもありますが、これも不適切な利用方法です。百歩譲って”影響力の高い雑誌”への投稿が評価されるのであれば、厳密にその論文の発行年に合わせたIFの値を調査する必要があります。

個人の研究評価の指標としては、同じくGarfield氏(=G氏)が考案した、論文そのものの引用数や引用論文を検索できるScience Citation Index(=SCI)があります。SCIでは、個々の論文の評価や影響力の他、同一著者の代表的な論文や、同じテーマを研究するライバルを見つけ出すことも可能です。本学では代行検索(実費)で調査することができます。

2. 出版者による意図的な操作

(例)学協会や出版社が自誌の引用を推進する

雑誌に対する評価としてIFに敏感になっている編集者たちの中には、誌面で自誌引用を推進したり、査読時にレフェリーや投稿者に働きかけたりして、値の操作を謀ることもあるようです。G氏がIFを考案するに至った「引用関係をたどることで、必要な文献を探し出す」という目的から大きく外れたバッドマナーです。引用を推進するのではなく、より引用されるような論文の輩出のために努めるのが本来の在るべき姿ではないでしょうか。

3. 科学界へ悪影響を及ぼすIFの誤用

(例)若い研究者たちが良いポストを求め、IF値の高い雑誌を選んで投稿する

高い評価を得るためIF高値の雑誌へ投稿し、編集者からのクレーム対応に時間・労力をかけ、意に反した修正のあげくに適わず、他誌への投稿が遅れるなどの悪循環があります。このような誤用は、日本、イタリアなど一部地域で広まっているようです。

4. IF神話、その他の盲点

- IFが算出されるのは、SCIの収載誌だけです。国別に見ると米国の雑誌が多く、ヨーロッパや日本の雑誌は不利になります。
- 1998年、G氏が長期間(15年間と7年間)にわたる被引用率をCumulative IFとして算出し、IFと比較しました⁽¹⁾。分子生物学的アプローチによる最新の文献ばかりが引用される分野、基礎医学などの古い文献もコンスタントに引用される分野、新しい記事が求められるLetter誌・総合誌などに、かなりの数値の違いが見られました。
- 特定の分野内で引用を集める専門誌と総合誌では、必然的に専門誌が不利なため、その補正としてScope Adjusted Impact Factors(=SAIF)が提唱されています。IFを、引用している雑誌数で割るため、学際的に広く引用されている雑誌は値が低く、特定専門分野を中心に少数の雑誌から引用されているものは値が上昇します。総合誌に有利になる現在のIFの問題点を修正し、より細分化された専門分野内で高い評価を得ている雑誌を浮かび上がらすことが出来るという特色があります。
- 「読まれている」と「引用されている」は一致しません。基礎知識を得るための教科書

やハンドブック、臨床系の解説誌などはよく利用されますが、引用の対象になることは少ないでしょう。しかし、これらの資料の重要性は誰もが認めるところです。

- ・ 時として、悪い意味で引用される論文、装飾の意図で引用される論文もあります。
- ・ 入手が困難な論文よりは、簡単に入手できる論文の方が良く引用されます。

<参考文献>

(1)Garfield E. Long-term vs. short-term journal impact-does it matter? The Scientist 12(3):11-12, 1998

図書館トリビア

JAMA の表紙は毎号絵画で飾られていますが、292(2),2004 は白無地になっています。1996 年より HIV/AIDS の特集号の時は、世界エイズデーの啓発普及イベント"Visual AIDS"の一つ、"A Day Without Art" (芸術のない一日) という美術館や画廊を閉館する運動にならって"A Cover Without Art"を掲げているためです。また、Neuron;44(4),2004 のように、白い表紙で編集者が亡くなったことに哀悼の意を表すこともあります。

メールマガジンに関する意見・質問は、運用係 unyo@lib.iwate-med.ac.jp まで。